

影絵の町

阿刀田高



角川書店

影絵の町

阿刀田高



影絵の町

昭和六十二年二月五日初版発行

著者 阿刀田高

発行者 角川春樹

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社宮田製本所

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話 営業部〇三―二三八―八五二一

編集部〇三―二三八―八四五一

振替口座 東京三―一九五二〇八 千一〇二

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan ISBN4-04-872458-4 C0093



影絵の町／阿刀田高

影絵の町

冴えない銅像

父の顔

海だらけの海

雪解け

白い壁

らせん階段

遠い宴

寄木の箱

甘い疑惑

にしん挽歌

椿 森

明日の菊

セ

三

元

五

九

八

一〇〇

一四

一三〇

一五五

一六

一七

銀座スクランブル

悪意

一九三

すわっていた男

一九

月の光

二〇五

白い橋

二二

年の値段

二七

道案内

三四

ハッピー・バースデー

三三

電話番号

三八

母ごころ

三四

鯉のはなし

三五〇

最良の人

三七

めぐりあい

三六四

装丁／矢吹申彦
カット／みはしまり

影絵の町



冴えない銅像

「こんな残酷なことが用意されているとは思わなかったわ」

陽子は滑らかな髪を耳に掻きあげながら呟く。視線の先には、黒い水と庭園灯の青白い光とがあった。

髪には櫛目がよく通っている。かすかに茶色を帯びているのは、染めているからだろう。会ったとたんは、

——少し老けたかな——

そう思ったが、こうして向かいあっていると、十年あまりの年月がどこかへ飛んで行ってしまふ。胃潰瘍の手術みたいにあの頃と今とが、途中を切つて繋がっている。

陽子と会うのは、たいていこのホテルのラウンジだった。ホテルの経営者は、よほどの保守主義者なのだろうか。窓から眺める風景も昔とほとんど変わっていない。しっかりとした記憶があるわけではないけれど、お濠と高い石垣と、そして樹木に覆われた皇居の様子、みんなそう

変化しているようには見えない。

今日、昼過ぎに陽子から電話があった。

「上京しているの。ぜひお会いしたいわ。七時から九時くらいまで……」

「なにごとですか」

「相談にのってほしいのよ。ごめんなさい。お忙しいでしょうけれど、お願い。なんとか時間を作って……」

夜は小石川の実家に泊まるのだと言う。その時間しかあいていないらしい。私のほうにも都合がないわけではなかったけれど、仕方ない、言われるままにホテルへ駆けつけた。

——相変らず自己中心の人だな——

そう思わないでもなかったが、相手が陽子となると、なんとなく許せてしまう。陽子はいつも無邪気だ。悪気がない。あとになってから自分の身勝手さに気づいて、ひどく恐縮する。あわてて埋めあわせをしようとする。高価な松茸の籠を贈って寄こしたことがあった。もうすぐ四十歳になるのだから、そんな性格は少しも変っていない。

今から十数年前、陽子と私はとても親しかった。

男と女の仲だから、あれも一種の恋愛だったろう。周囲はやがて結婚でもするのだろうと考えていた。

まったくの話、私自身もそれを少し考えていた。「少し」というのは、しばらくあとになってからそえた副詞である。あの頃は、それなりに深く考えていたつもりだったけれど、私自身

の頭の中で結婚について考える面積がとても狭かった。全部を陽子のために使ったとしても、そうたいした広さではない。仕事のこと、将来のこと、もう少し気楽に人生を楽しみたいこと、願望がほかにたくさんあって、恋愛とか、結婚とかについて考えるのは、相対的に「少し」でしかなかった。あとになって、それがわかった。

そんな私を見て、陽子は、

——頼りない——

と思っただろう。

それに、陽子はもともと私に対してさほどの愛情を持っていなかったろう。残念だけど、そうだった。女は心の中ではつきりと分類している。これは結婚用の男。こっちは適当に仲よくする男……。

突然の結婚を知らされたのも、このホテルのラウンジだった。

「私、結婚するの」

「へえー」

さほど驚かなかった。こんなこともあるかなと心のどこかで予測していた。

それでも、そのあと立ちあがったとき、軽いめまいを覚えたのを思うと、やはりショックはあったのだろう。

陽子は自分の結婚のことだけを雄弁に話した。

「たいしたことないんだけどネ」

そう言いながらも、陽子自身、この結婚におおいに乗り気らしいとわかった。厭なことをやる人ではない。事実、話を聞いてみると、わるい結婚ではなかった。私はまだ結婚のことなど考えていなかったし、陽子がよい縁を得て結婚をするのは、彼女の当然の権利だ。

「そんなことを言わないで、僕のところへ来い」

と言える準備もなかったし、そう言ってみたところでもはや受け入れられる余地はなさそうだった。

「いいじゃないか」

「結婚式に来てくれる？」

相手の男の故郷は仙台で、そこで結婚式を挙げ、しばらくは仙台に住むことになるらしい。

「呼ばれば行くよ」

新婦のボーイ・フレンドは披露宴に行くべき人かどうか。陽子はいっこうに頓着するふうもなかったが、結局のところ招待状は来なかった。

しばらくは愛用の品を失ったときみたいに微妙なもの足りなさを覚えたが、それもすぐに消えた。陽子からは時折季節の挨拶が届く。男の子が生まれ、女の子が生まれた、と知った。

その子どもたちが中学生になっているというのだから、もうずいぶんの歳月が流れている。

この十数年間、陽子が上京したときなど、ほんの短い時間だけ会ったこともあったが、ゆくり話をするのは久方ぶりだった。

「なんでそうなのかしら。子どもたちには相変らずやさしいパパなのよ」

ホテルに向かう道すがら、あまりよい話ではあるまいと想像した。どんな話かとある程度予想をめぐらした。

おおむね的中していたと言つてよい。

「相手はもと彼の会社にいた若い娘なのね。もう二年も続いた仲なんですつて」

陽子は、この世にこんな理不尽があつていいものかとばかりに感情を高ぶらせて話すが、聞いてみれば、さほどこめずらしい事件ではない。世間にさらに転がっている出来事だ。

陽子の夫だから、きつと四十二、三になっているだろう。職場の若い娘と親しくなつて不思議はない。親しくなれば深入りしてしまうのが、恋愛の力学だ。

「たいした娘じゃないのよ」

陽子は問題の核心をえぐるような調子で言う。

——ああ、なるほど——

理不尽なのは夫の情事そのものではなく、あんなつまらない娘と親しくなつたことだと陽子は思っているのかもしれない。私のほうがチャーミングなはずなのに“そんな気持ち”がきつとあるのだろう。髪を掻きあげる仕ぐさにそんな誇りがある。コケットリイがある。

——本当にそうかな——

ここらあたりはおおいに疑問の浮かぶところだ。たしかに陽子は今でも美しい。顔なんかは昔とちつとも変らないほどだ。心ばえも人によって好き嫌いはあろうけれど、無邪気で、明快

で、垢ぬけたセンスの持ち主だ。

客観的な物指しを当ててみれば、田舎の小娘なんかに負けないほどチャーミングな女性だろうけれど、夫の物指しはまた違っている。

人間は悲しいけれど飽きるときがある。つぶらな瞳で「好きです」と言われれば、心が動く。長い一生のうちには、一つか二つ、若い肉体に触れてみたくなる。一つ、二つならまだましなほうかもしれない。

「彼は、”つい深入りしてしまった。すぐに別れる”って言ってたけど、ぜんぜん切れていないのよね」

なにもかも型通りの話だった。

男は、女を同じ会社においてはずいと思つて退職させた。女はほかの会社に勤め、アパートを借り、そこで男の来るのを待つようになった。結婚なんかどうでもいい。愛さえあればいい」と、けなげな覚悟でいるらしい。さし当たっては決定的な問題はなにも起こっていない。トラブルのきつかけは、人から知らされて陽子が気がついたから。お節介な人もいるものだ。水面下に隠しておけば、だれも悩みやしなかった。

ともあれ、知ってしまった陽子がおとなしくしているはずがない。だれでも怒るが、陽子は特に気位が高い。自尊心をこれ以上傷つけられることはほかにあるまい。

「どうしても許せないの。許しちゃいけないことだと思ふの」

「うん」

「見合い結婚けっこんだったら、そく実家に帰っているわ。でも、私たち、恋愛れんあいだったから……」

「ふーん」

すぐには言葉の意味が飲み込めなかった。見合い結婚は親の責任だから、夫に問題があればいつ実家へ帰ってもいい。だが、恋愛となるとそうもいかない。そんなロジックらしいと、しばらくたつてわかった。

もう結婚して十年以上もたっているのに、そんなことを考えるのだろうか。陽子らしいと言えば陽子らしい。それとも女はみんなそんなふうに思うのか。

「こんなこと親には言えないわ」

「そうかな」

「そうよ。だから、あなたにうかがいたい。全部すっかりお話ししたわ。だから相談にのってくださいな。お願い。こんなこと、あなたにしか聞けないの」

「なんだい？」

「離婚りこんしたほうがいいのかしら。思い留まったほうがいい？ あなたが「離婚なんかやめろ」と言えば思い留まるし、あなたが「離婚したほうがいい」と言えば、そうするわ。本当にそのつもりで来たの」

「困ったねえ」

「易者よりはいいでしょ。すぐでなくてもいいわ。今夜、お別れするまでに……。どちらか言って」

陽子は視線を窓の外へ送った。

気がつくと、頬に涙が流れている。とめどなく溢れ始める。ついには両手で顔を覆い、嗚咽を漏らした。

訝しそうな視線が周囲から飛んで来る。

「少し歩こうか」

陽子をうながして席を立った。

ホテルを出て長い横断歩道を渡った。道を平川門のほうへと採った。

日中は暖かい日射だったが、夜になるとさすがに空気が冷たい。コートの襟を立てた。

右手には、丸の内界隈の高層ビルが背比べをするようにいくつもいくつもそびえ建っている。左手は黒いお濠を距てて皇居の森が低い臥竜を這わせている。

それを見おろして月がぼっかりと天に懸かっていた。

「きれい」

涙はもう乾いたのだろうか。陽子は首をまわし魅入られたように空を仰いだ。

このあたりは東京で一番美しいところかもしれない。

「青葉城もきれいなんじゃない？」

「ぜんぜん。比較にならないわ。むしろはただの古い城ですもん」

言いかたに刺がある。青葉城までが、不倫の恋のとはっちりを受けているようだ。